



高岡・饒漱石反党連盟事件に隠されたもの

緒形, 康

(Citation)

神戸大学史学年報, 39:1-36

(Issue Date)

2024-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491654>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491654>



高岡・饒漱石反党連盟事件に隠されたもの

緒形 康

1. 過渡期の総路線が策定されたとき事件は起こった

共産中国が成立した最初の数年、スターリンの対中援助は多分に抑制的だった。第二次世界大戦がソ連経済に与えた壊滅的な打撃が大々的な援助を許さなかったという事情のほかに、東洋のチトーの出現を恐れるスターリンが、中国を新民主主義から社会主義へと性急に改造する政策に反対したからである。1952年9月3日の周恩来との会談で、スターリンは、中国側が提示した第1次5か年計画における工業生産額の年間20%成長という目標を15%に引き下げることがを提案した。同年10月、ソ共第19回大会に参加した劉少奇が伝達した、今後10年から15年の間に中国の農業合作化と集団化を完成させるという中共中央の決定にも反対した。53年2月23日、モスクワは、工業生産額の年間目標値を13.5~15%まで、さらに低く設定するよう中国側に申し入れ、中共中央は目標値を14.7%に決めた。中国に対する大型工業プロジェクト147項目のうち、ソ連がこのとき売却に同意したのはわずか50項目にすぎなかった⁽¹⁾。

1953年3月5日のスターリンの謎めいた急死は、ソ連の中国援助に対する抑制的姿勢を解き放った。スターリンの後継政権は、中国の急激な社会主義工業化を自国に対する脅威とは看做さなかったし、毛沢東をチトーの再来とするスターリンの懷疑も共有しなかった。5月12日、毛沢東はクレムリンにせき立てられるままに、慌ただしく朝鮮戦争の終結を宣言した。それに応えるかのように、5月15日、ソ連は計141件の大型援助プロジェクトを中国に売却した。10年から15年の間に新民主主義から社会主義への改造を完成するという「過渡期の総路線」が、こうして本格的に作動し始める。53年6月15日の中央政治局会議で、毛沢東はこう宣言した。「党の過渡期における総路線と総任務とは、10年から15年、あるいは、もう少し長い時間内で、国家の工業化、農業と手工業と資本主義工商業に対する社会主義改造を

基本的に完成させることである。この総路線が我々の各工作を照らす灯台となる。この総路線を離れてはならない。離れれば、「左」傾もしくは右傾の誤りを生むことになる。」⁽²⁾

ところが、「過渡期の総路線」の提出とほとんど軌を一にして、毛沢東講話が警告した「左」傾と右傾の誤りが党内に現れた。高崗・饒漱石反党連盟事件（以下、「高崗事件」と略称）が、それである。

高崗は東北局書記、中央人民政府主席を務めた後、1952年10月8日、北京で新設の国家計画委員会主席に就いた。饒漱石も華東局第一書記、華東軍政委員会主席を務めた後、53年4月に北京で中央組織部長に就いている。過渡期の総路線に対応した党と政府の機構改革と人事問題が議題に上っていた時期である。高崗と饒漱石はこの機に乗じて、党と国家の最高権力の篡奪を企て、党内で陰謀活動を展開し、党内の地位が毛沢東に次ぐ劉少奇と周恩來の引き落としを図ったと指弾された。54年2月の7期4中全会が2人の反党分裂活動を暴いた後、55年3月の中共全国代表者会議において、鄧小平の起草した「高崗、饒漱石の反党連盟に関する報告」が採択され、2人は党籍を剥奪、全職務を解任された。

2. 3つの起訴状

高崗と饒漱石を告発する起訴状に当たる文書は、周恩来、鄧小平、毛沢東の執筆になる次の3つである⁽³⁾。

周恩来「高崗問題に関する座談会上の発言綱要」（1954年2月25日、総括発言。3月1日、中央政治局批准）

鄧小平「高崗、饒漱石反党連盟に関する報告」（1955年3月21日、中共全国代表者会議通過）

毛沢東「中共全国代表者会議における講話・結論「三、高崗、饒漱石反党連盟に関して」」（1955年3月31日、中共全国代表者会議通過）

以下に、高崗事件に関するこれらの基礎文献を引用しながら、当該事件の概要を整理してみることにしよう。説明の便宜上、上記の3文献をそれぞれ周起訴状、鄧起訴状、毛起訴状と略記する。引用に際し、本論では必要な情報を括弧内に適宜、補足した。

「高岡、饒漱石の良からぬ事情は知っていたが、彼らの陰謀は見抜けなかった」と述べる同志がいる。ここで二つの状況を分けて考えたい。一つは、高岡、饒漱石から党の原則を離れた多くの発言を聞き、高岡、饒漱石と反党活動について相談を受けたことがある場合で、それなら彼らの陰謀は見抜けたはずだ。もう一つは、彼らの良からぬ事情は承知していたが、その陰謀は見抜けなかった場合で、見抜けないのは、むしろ当然である。中央もまた 1953 年になって、ようやく彼らの反党陰謀に気づいた。財經会議と組織会議、それに財經会議より前のさまざまな問題を経て、彼らが良からぬことを企てているのを知った。財經会議の間、彼らの良からぬ活動を察知し、その度に、彼らの活動を制止した。そこで、彼らは以後、完全な秘密活動に転じた。こうした陰謀、陰謀家、陰謀集団を、我々は 53 年の秋と冬にようやく突き止めた。高岡、饒漱石について、それまで長い間、悪人だと見抜けた人はいなかったのだ。」(毛起訴状)⁽⁴⁾

この起訴状で、毛沢東は、「高岡・饒漱石反党連盟」が 1953 年 6 月 13 日～8 月 11 日開催の全国財經工作会議、同年 9～10 月開催の第 2 回全国組織工作会議において、本格的な活動を始めたと述べるとともに、「財經会議より前のさまざまな問題」からも、彼らの反党陰謀の兆候を察知できると書いている。この「財經会議より前のさまざまな問題」について、周起訴状は、その(3)条と(9)条で、次のように告発した。

「(3) デマを飛ばして挑発し、さまざまな矛盾を利用して、党内の不和を醸成した。高岡は中央の指導的同志が提出した中央政治局と中央書記処の「名簿」なるものに、某の名前はあったが某の名前がないと嘘の証言を行い、中央の指導的同志は、某同志が中央の某部の仕事を担当するのに賛成せず、某同志の某工作における正確な指導を支持していないと告発して、党内の不和をかき立てた。高岡は某同志が誤って提出した中央政治局と中央各部の名簿に関する個人的意見を使って、さまざまなデマを流し、広い範囲で挑発行為を行った。」⁽⁵⁾

「(9) 党と国家の権力を篡奪する陰謀活動を進めた。財經会議の前後より、また、部長会議という国家制度を採用するか否か、党中央に副主席を増設す

るか、それとも総書記を増設するかという問題提起を中央が行なってより、高崗は党と国家の権力を奪取する活動を加速させた。彼は毛沢東同志の旗を偽って掲げ、毛沢東同志の言論を偽造し、2人の中央の指導的同志に積極的に反対し、別の2人の中央の指導的同志を偽って推戴して、自分を中央副主席にするよう、併せ要求した。」⁽⁶⁾

「財經会議より前のさまざまな問題」とは、新憲法に規定する予定の国家行政機関をソ連に倣った部長会議制とするか、党中央に副主席もしくは総書記の職位を新設するか否かという問題をめぐり、「中央の指導的同志」が、自己の発案になる党と国家の要職に関する人事名簿を作成して、それを高崗に見せたことから生じた。その名簿には、高崗が当然入るべきだと考えた「某」の名前がなく、別の「某」の名前が記されていた。それに不服だった高崗は、この名簿の人事情報を「全国組織会議の参加者、さらには南方各省まで漏洩し」(毛起訴状)⁽⁷⁾、この名簿作成に関連して劉少奇と周恩来を非難すると同時に、林彪と陳雲には、副主席もしくは総書記に就任するよう勧め、自らも副主席のポストを得ようと画策した。

この名簿を作成した「中央の指導的同志」とは、中央組織部副部長の安子文を指す。彼の作成した「政治局委員の名簿」(毛起訴状)⁽⁸⁾には、林彪の名がなく、代わりに薄一波の名があったと高崗は言った。薄一波は当時、政務院財經部の副部長を務め、1952年12月には毛沢東に無断で国営企業と民間企業に一律に課税する新税制案を策定したため、53年6月に始まる全国財經工作会議で、多くの会議参加者から糾弾を受け、自己弁明に追われた。劉少奇の腹心の部下でもある。だから高崗は、安子文の名簿作成の裏には劉少奇の指導があるとにらんでいた。

さて、安子文の作成した名簿が財經会議と組織会議で大きな論争を呼んだ後、毛沢東たちが「高崗・饒漱石反党連盟」の存在を確信するにいたる事件が「1953年の秋と冬」に起こる。その間の経緯を詳しく述べるのが、鄧起訴状である。

「この恥ずべき陰謀家たちはこの期に及んでも、いささかも悔いることなく、財經工作会議から組織工作会議までの間に進めた卑劣な活動によって、遠からず自分たちが望む成果を得られるに違いないと考えていた。高崗は南

方の活動（10月3日～11月1日）から北京に帰ってより、自分の中央に反対する宣伝が効果を収めたと思い、より積極的に、より熱狂的に、党と国家の最高権力を奪取する陰謀活動を展開し、1953年12月にいたって、毛沢東同志が前例に倣って自分の休暇期間中、劉少奇同志に中央の指導工作の代理を依頼した際、反対の動機を出し、かつ水面下で、自分を党中央の総書記あるいは副主席に就けるよう要求し、政務院総理の人選も換えて、自分をそのポストに充てるよう求めた。」⁽⁹⁾

「このとき、彼の反党宣伝を聞いた多くの同志が、中央に彼の罪惡に満ちた陰謀を告発した。毛沢東同志を中心とする中央書記処は、高崗と饒漱石を除く北京在住の全中央委員が一致して支持するなか、決然と高崗・饒漱石反党連盟の陰謀活動を阻止し、1954年2月、党の7期4中全会が、こうした反党連盟に壊滅的な打撃を与えたのである。」⁽¹⁰⁾

毛沢東もまた、劉少奇を自分の休暇中に中央の代理指導者とする考えを高崗に退けられた後に開かれた中央政治局拡大会議（1953年12月24日）で、次のように発言している。

「北京には2つの司令部がある。一つは、私を中心とする司令部で、明るい風を吹かせ、明るい松明を灯している。もう一つは別の人物を司令部とし、暗い風を吹かせ、暗い火を掲げ、一脈の地下水と呼ぶべきものだ。政治は一つの門に出自するのか、それとも複数の門に出自するのか？」（毛起訴状）⁽¹¹⁾

安子文の「有薄無林（薄一波を記し、林彪を欠いた）」名簿をめぐる論争は、財經会議と組織会議の開催中に、党と国家の最高指導権力の篡奪という反党陰謀を惹起し、1953年10月の高崗による南方各省の遊説活動を経て、「高崗・饒漱石反党連盟」が北京の政局を超えて広範囲に形成される情勢を生んだ。この危急存亡のときに、「彼（高崗）の反党宣伝を聞いた多くの同志」が毛沢東に、その陰謀活動を告発したのである。毛沢東自身も、劉少奇を中央の指導から退けようとする高崗の主張から、彼の企てる「暗い風を吹かせ、暗い火を掲げ」る新しい司令部の存在を見出すにいたった。こうして「12月の秋と冬」、事態は急転直下、高崗の陰謀活動から党を救出する運動

が巻き起こったのである。

「高崗・饒漱石反党連盟」と言うが、反党活動の主力は、あくまで高崗の方であった。ここでは詳述できないが、饒漱石が「反党連盟」のもう1人の主犯とされたのは、55年4月3日午後8時、中共全国代表者会議が閉幕した直後に逮捕された潘漢年を主犯とする「潘漢年・楊帆反革命集団」との関連からである⁽¹²⁾。

饒漱石は、華中局副書記であった1945年2月15日、潘漢年が39年に南京にて日本軍および汪精衛と秘密裡に接触したことを中央社会部部长の康生に告発した⁽¹³⁾。2月23日、毛沢東は劉少奇と康生が共同署名した華中局宛て電報で、この情報を否定し、潘漢年を擁護したが、中共の南方工作が汪精衛の南京国民政府や日本の人脈関係を利用したことは認めている⁽¹⁴⁾。毛沢東と康生が、この件の間接責任を免れないことは明らかだった。ところが、54年3月9日になって、長く病気静養中であった康生は、中央弁公庁主任の楊尚昆に接触を試み、高崗事件を利用して、潘漢年による日本・汪精衛内通事件の揉み消しを画策し始めたのである⁽¹⁵⁾。

饒漱石の不幸は、彼が「高崗・饒漱石反党連盟」と「潘漢年・楊帆反革命集団」の要に位置し、毛沢東が肅清を進めるうえで決して許容できない人物だった点にある。1953年の財經会議と組織会議で「高崗・饒漱石反党連盟」が形成されたという毛・周・鄧起訴状の弾劾は、後から付けた理屈にすぎない。

毛・周・鄧起訴状は、高崗事件が生まれる原因、それが発展してゆく経緯、それを阻止する党中央の時宜を得た対応に至るまで、十分な状況証拠と関係者のアリバイを添えた説明を加えて、間然するところがない。毛、周、鄧の3人が緊密な連携を組み、事実の相互関係について入念な打ち合わせをしたうえで公開されたものであった。

3. 鄧小平講話が明らかにした4つの事実

しかしながら、高崗・饒漱石反党連盟事件は冤罪であり、高崗と饒漱石が党と国家の最高権力の篡奪を企んだ事実は存在しないとする意見は、事件発生当初から根強くあった。ただ、そうした意見を裏づけるに足る証拠が一般の目に触れることは、毛沢東が死去し、文化大革命が終焉する1970年代末までほぼ皆無だった。それが可能になったのは、胡耀邦が78年に中央組織

部長に就き、建国から文革終焉に至るまで無実の罪に呻吟した党员の名誉回復に動き出してからである。だが、この名誉回復キャンペーンには重大な禁区が設けられていた。

1981年の11期6中全会を通過した「建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議」は、「高崗・饒漱石反党連盟」について、「集団」、「連盟」という表現は取り消したものの、「反党」、「篡奪」の罪名を残した。理由ははっきりしている。この反党連盟を処罰した中心人物が、改革開放の総設計師である鄧小平その人であったからだ。鄧小平は高崗事件を果敢に処理した功績を買われ、高崗がそのポストを狙っていると非難された、当の中央書記処総書記に就任することを毛沢東より認可された。彼を政界の頂点に押し上げたのは高崗事件にはかならない。

ここで指摘すべきことは、「建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議」を起草中の1980年3月19日、鄧小平が、胡耀邦、胡喬木、鄧力群といった側近たちに、54年から55年にかけて執筆された毛・周・鄧起訴状が触れなかった新たな事実を初めて明らかにしたことである。それは2つの講話のかたちで発表された。第1講話は、『鄧小平文選（1975～1982）』人民出版社、1983年、に「『建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議』起草に関する意見」と題して収められた。第2講話は、「高崗・饒漱石反党連盟」の成員として処罰された高崗の側近、張明遠（元国家機械委員会副主任）の記録になる「鄧力群が伝達した鄧小平講話」である。ここでは、2つの文献を「鄧講話」と総称する。

第1講話：「高崗、饒漱石の事情については、私ははっきりと承知している。毛沢東同志が1953年末に中央を1線と2線に分けて以来、高崗の活動はきわめて精力的になった。林彪の支持を得て、彼はようやく、あのよう奔放に振る舞うことができた。当時、東北は高崗自身のもので、中南は林彪、華東は饒漱石のものだった。西南（鄧小平）に対しては、勧誘という方法で、私と正式な交渉を行い、劉少奇同志が未熟だから、私と協力して劉少奇同志を打倒しようと言った。私は態度を明確にして、こう言った。劉少奇同志の党内における地位は、歴史的に形成されたものであり、総合的に見て、劉少奇同志は優れており、このような歴史的に形成された地位を変えるのは不適切であると。高崗は陳雲同志とも交渉し、こう言った。君が一つ、私が一つ

では、どうかと。こうして、陳雲同志と私は事の重大性に初めて気づき、直ちに毛沢東同志に事態を告げ、彼の注意を喚起した。高崗が劉少奇同志を打倒するために、利益交換と陰謀詭計というやり方を使ったのは、極めて不正常であった。したがって、高崗に反対する闘争は依然として肯定されねばならない。」⁽¹⁶⁾

第2講話：「高崗があのように大胆に活動できたのには、毛主席にも責任がある。毛主席は建国当初、劉少奇同志と周恩来総理に不満があったため、高崗を2人よりも持ち上げて、「経済内閣」を組織させた。これが計画委員会で、大行政区の首脳の何人かが全て委員となり、その権力は強大で、政務院の経済大権を全部持っていつてしまった。高崗はさらに毛沢東から情報を得て、政治情勢を探ったが、毛主席に重用されたうえに、4つの大行政区の支持も得たものだから、頭が眩んで方向を転換したのである。高崗による劉少奇同志の批判は完全な誤りではなく、その批判には妥当なものもある。土地改革における邪魔者の除去という指示や天津講話には、やはり欠点と間違いがあった。」⁽¹⁷⁾

鄧講話で明らかにされた「高崗・饒漱石反党連盟」に関する新事実は、次の4点に要約できる。

第1に、かつての起訴状は、高崗と饒漱石の陰謀活動を告発したのが、「彼（高崗）の反党宣伝を聞いた多くの同志」だと書いたが、鄧小平はその「同志」が自分と陳雲を指すことを打ち明けた。鄧小平と陳雲が毛沢東に密告に及んだ時期を「1953年末」と書くのは、毛起訴状が「53年の秋と冬」と述べたのを再確認したものである。だが今や、鄧小平は、高崗の正体が暴かれたのは、中央委員会を1線と2線の指導に分け、自らは1線の指導から退く意向を毛沢東が示してからだと述べる。これまでの起訴状は、中央に副主席もしくは総書記を増設する案や、国家行政機構に部長会議制を導入する案に言及するのみだったが、ここで初めて、毛沢東がその指導を後進に明け渡すという最高権力委譲の意思表示が「1953年末」の破局をもたらしたと断言したのである。

第2に、毛沢東の態度表明に呼応した高崗と饒漱石の陰謀に加担したのが林彪であったことを公開した。実際、1953年7月初め、財經工作会議の最

中に、北京の西山で静養する林彪を、高崗が多くの軍人を連れて訪問したことがあった。高崗は自ら、会議代表が宿泊する北京飯店まで出向き、6つの大行政区と軍隊の指導者および地方幹部の総勢 20～30 人を引き連れて、中国が直面する諸問題や財政工作会議に対する意見を聴取する目的で林彪を慰問したのだ⁽¹⁸⁾。「有薄無林」名簿で紛糾する政局の渦中におけるこの行動は、多くの人々に、林彪を自陣へ引き込み、劉少奇に圧力をかける目的からなされたのではないかという疑念を引き起こした。7期4中全会で、林彪は高崗との関係を不問に付されたが、80年3月16日に鄧小平が高崗事件の決定を弁護したときは、ソ連逃亡の途上で死亡し、四人組とともに反革命集団の首謀者というレッテルを貼られた後であった。もはや、林彪に遠慮する必要はなかった。

林彪は東北局の元書記であった。高崗は林彪のほかに、華東局書記の饒漱石をも仲間に入れ、西南局書記であった鄧小平に触手を伸ばした、と鄧講話は主張する。この高崗の勧誘を、鄧小平は劉少奇の党内地位が歴史的に形成されたという理由から拒絶した。鄧小平の拒絶に遭った高崗は、今度は陳雲に働きかけ、中央に増設する副主席のポストを私と君とで分けないかと誘った。だが、陳雲もこの勧誘を退けた。鄧小平と陳雲は、これを機に、高崗の不穏な動きを毛沢東に密告することを決意したのである。

第3に、毛沢東自身も高崗事件の責任を免れないことを明記した。1952年8月以後、鄧小平、高崗、饒漱石、鄧子恢、習仲勲の5人が大行政区の首長の座を離れ、北京に配属換えとなった。毛沢東は新民主主義から社会主義へと飛躍する「過渡期の総路線」を実現するために、大行政区の責任者を北京に集めて、強力な中央集権制を敷こうとしていた。鄧小平以下、「5馬」と呼ばれた大行政区の責任者は、こうしてそれまでの権力基盤から引き離され、毛沢東の監視下に置かれることになる。「5馬」のうち、高崗の処遇は別格であった。「経済内閣」の異名を持つ国家経済委員会は、「過渡期の総路線」を実現する司令塔の位置を占め、周恩来が管轄する政務院（現国務院）とその行政権力を2分した。高崗はその主席に任命され、副主席には鄧子恢、委員には陳雲、鄧小平、彭德懷、林彪、饒漱石、彭真、習仲勲、黄克誠、劉瀾濤、薄一波が就いた。大行政区の元首脳のうち、鄧子恢（中南局）、鄧小平（西南局）、林彪（中南局）、饒漱石（華東局）、習仲勲（西北区）の5人が、高崗の配下となっている。毛沢東は過渡期の総路線の舵取りを高崗に委

ねたと言っても過言ではなかった。この過剰な高崗への肩入れが、高崗の反乱を惹起したと、鄧小平は述べたのである。

第4に、鄧小平は、劉少奇の建国後の施策に幾つかの誤りがあり、そのことが毛沢東の不興を招き、高崗を重用する原因となったのは否定できない事実であるとして書き、劉少奇の失策の具体例として、「老区の土地改革方針」（1948年1月13日）や、「天津講話」（49年4月～5月になされた報告と談話の総称）を取り上げた。前者は、老解放区における土地改革の方針として、「党内の整風、邪魔者の除去、地主との闘争の3つを結合させる」という政策を掲げた⁽¹⁹⁾。「邪魔者」とは土地改革に理解を示さない党の幹部を指すが、彼らを批判する際、極「左」的な打倒の方法を採ることを、劉少奇は厳に戒めた。「天津講話」も、解放まもない天津経済に占める資本主義の扱いに際し、私営企業を擁護し、まだ発展途上にあった私人資本主義を保護する必要性を唱えたものである。いずれの見解も、中国の社会主義化を急ぐ毛沢東の理解を得られず、文革期には劉少奇の罪状を示す証拠物件とされた。当時、東北局の責任者の1人であった高崗も、これらの文章を強く批判した。鄧小平は54年2月の7期4中全会で、天津講話は個々の欠陥は別にして、総じて建国初期の党の政策に「左」傾の偏向が生じるのを防ぐうえで大きな役割を果たしたと述べていた⁽²⁰⁾。しかし80年3月になって、その欠点と間違いを強調する方向に転じたのである。

鄧小平のこの方向転換には理由がある。高崗未亡人、李力群が2006年に語ったところでは、胡耀邦は高崗の名誉回復を議論する「高崗平反小組」を中央組織部に設けた。そして自ら高崗の拠点であった東北と西北に赴き、多くの幹部から高崗事件で被った迫害や差別に関する事情聴取をした。ところが西安から戻ると、「286（鄧小平）に呼ばれて、愚か者と批判された。西北まで行って馬鹿なことをしゃべるのは止めろ。高崗が毛主席に反対せず、党に反対しなかったと言いふらすなど、もってのほかだ。胡耀邦はこう反論した。高崗が劉少奇に反対したのは確かですが、それをもって誤りとすることはできません。2人とも政治局委員でしたから、それぞれ異なる意見を出すのに何ら不都合はなかったはずです。しかし、286はこの名誉回復の試みを中止させ、胡耀邦は黙って引き下がった。」⁽²¹⁾ 鄧講話が、劉少奇の政策の部分的誤りを指摘したことには、以上の胡耀邦とのやり取りが影響している。加えて、劉少奇の影響力を削ぎ、改革開放の政局を自己に有利に展開したい

という思惑もあった。

4. 趙家梁供述書の登場

胡耀邦を始めとする文革清算派の圧力に抗するため、鄧小平は、従来の起訴状には触れられなかった、高崗の陰謀を毛沢東に密告し、毛沢東を事件の鎮圧へと向かわせる機縁を作った人物として、事件の表舞台に自身と陳雲を登場させた。毛沢東および党の危機を救った主役に自らを充て、高崗と饒漱石を「反党」と「篡奪」の廉で処罰した自己の行為を正当化して、当該事件の名誉回復を拒んだのである。次に、1971年の林彪事件で林彪の反党行為が暴かれた機運に乗じて、それまで議論の圏外に置かれた林彪を、事件のもう1人の黒幕として描いた。さらに、「2つの全て」派という毛沢東原理主義者たち（華国鋒、汪東興）を78年11月に肅清した余勢を駆って、毛沢東が事件全部を切り回した舞台監督であることを示唆した。劉少奇の過去の負の側面に触れたのは、改革開放の新時代を迎えるに際し、劉少奇派を政治の最前線から退け、自らと陳雲の派閥によって以後の政局を運営しようとする意思の表れだった。

2007年10月、中共第17回全国代表大会において中央政治局常務委員会序列6位に習近平が選出され、次期総書記の地位が確定すると、「高崗・饒漱石反党連盟」に対する評価の見直しを求める声がにわかに高まった。習近平の実父は、高崗と並ぶ陝北革命根拠地の創設者、習仲勲である。高崗事件で批判を免れたものの、やはり陝北革命根拠地の指導者の1人、劉志丹の生涯を描いた歴史小説『劉志丹』の出版を支持したことが、高崗事件の決定を覆す陰謀を画策するものだと断罪され、8期10中全会（1962年9月）で、「習仲勲、賈拓夫、劉景範反党集団」の主犯として逮捕、16年の隔離審査の憂き目に遭った。78年4月、監禁を解かれた後も、北京には戻れず、広東の工作に従事。80年に名誉回復されたが、89年の六四天安門事件における中央の対応に異議を唱え、90年、南方での休養という名目で、政界から追放された。

高崗再評価を象徴する書物が上梓されるのは、この習仲勲の子息の総書記就任が内定した後の2008年だった。趙家梁と張曉霽の共著になる『碑文なき墓に眠る過去：北京における高崗（半截墓碑下的往事：高崗在北京）』（大風出版社）がそれである。趙家梁は高崗の秘書を務め、張曉霽は「高崗・饒

漱石反党連盟」の一員、張明遠の長女であった。趙家梁は高崗の毛沢東宛て遺書の整理にも携わった。1954年2月17日、最初のピストル自殺を敢行する直前、高崗は遺書を焼却したが、その事実を知った周恩来の命を受け、趙家梁がこの重要文献の復元を試みたのである⁽²²⁾。高崗遺書はこれまで断片的に紹介されるのみで、その全文は今もなお公開されていないが、趙家梁と張曉霽の共著は、この遺書の記述を基に、高崗の反党活動をその生涯の軌跡に照らして詳細に検証した。高崗が残した重要文献としては、このほかに、「私の反省」（54年4月29日）がある。高崗の拠点であった「東北地区党高級幹部会議」を通過した「7期4中全会を擁護し、高崗・饒漱石問題を討論することに関する決議」を中央政治局が批准したことを受けて書かれた。しかし、遺書や「私の反省」が描く高崗事件の細部には、毛・周・鄧起訴状や鄧講話とは、幾つかの点で大きな食い違いがある。我々は以下、趙家梁と張曉霽の共著を「趙供述書」と名付け、毛・周・鄧起訴状および鄧講話と同書の記述の差異を検討するなかから、高崗事件の真相に近づくことにしよう。

5. 趙供述書が語る「有薄無林」名簿問題

趙供述書のなかで最も重要な部分は、高崗事件のそもそもの発端とされた「有薄無林」名簿が、どのような経緯で高崗の手元に届いたかについての記述である。

「1953年2月、毛沢東は党の中央書記処の指導体制を調整することを提起し、劉少奇に、その叩き台を作るよう委託した。

スターリンが逝去（53年3月5日）してから、劉少奇たちは、スターリンの個人的影響が強すぎたことに鑑み、中共は個人崇拜を防止し、集団指導を強化して、かつ、それに適合した組織改革を提出せねばならないと考えた。党中央に総書記を設けるか、それとも何人かの副主席を増設するか。部長集団指導制を実行するか、国家が部長会議もしくは議会制を実行するか。劉少奇は、中央書記処の分担責任者の名簿も提出して意見を求めた。」⁽²³⁾

「1953年3月、劉少奇は、中央委員会の各部門における指導人員分担名簿を起草し、高崗の意見を求めた。高崗は、劉少奇はこの名簿を使って自分の考えを探っているな、だが、それにしては、名簿は人員を並べただけで、新

意がなく、喫緊の問題を解決することができていないと考え、この意見を劉少奇に告げ、毛主席にも報告した。

今ここで述べたいのは、この名簿のことではなく、1953年4月に、中央組織部の副部長である安子文が起草した「中共第8回全国代表大会」の政治局委員名簿である。

では、高崗はこの名簿をどうやって得たのか？

高崗は自己批判の際に、こう語った。1953年4月上旬のある正午のことだったか、毛沢東の機要秘書が1枚の文書を送り届け、高崗自ら受領した後は、速やかに閲覧、引き渡すようにとのこと。普通の状況では、中央が文書を回覧する際は、それがどれほど機密を要し、かつ重要なものでも、中央の機要局から専門の人員が派遣されて、秘書がそれを受領することになっていた。ところが、このときだけは例外で、毛沢東の機要秘書が直接、高崗本人に送付し、かつ閲覧後、直ちに回収を求めたのだ。毛沢東がこの文書をどれほど重視したかが判るし、この文書が最上級の機密を要する重要なものであることを物語っている。後から知ったことだが、それは安子文が起草した「中共第8回全国代表大会」の政治局委員と各部の分担名簿であった。高崗が驚いたことに、その政治局委員の名簿は薄一波の名を載せるが、林彪の名はなかった（「有薄無林」）。初めて見る名簿だった。

この名簿はどうやって毛沢東の手元に届いたのだろうか？ さまざまな説があるが、最も可能性が高いのは、安子文が毛沢東に提出したというものであろう。

「有薄無林」は、当時にあっては確かに尋常なことではなく、安子文がこの名簿は自分で書いたと主張したにもかかわらず、高崗は、これは劉少奇の意見を踏まえたものだと考えた。彼は自己批判の際、こう認めた。「安子文が中央政治局委員の名簿を勝手に起草するはずがないと、私は判断した。安子文の後ろには、もう1人の人物がいる、それは劉少奇である。劉少奇同志の意向を受けて、政治局、書記処、各部委員の人事を按配したのである。」高崗は、陳雲、林彪、黄克誠らに、自分の考えを語り、林彪には、「あの名簿に君の名はなかったと記憶する」と伝えた。

彼は、毛沢東が他の同志の意見も聞きたがっていると思ったので、朱徳や鄧子恢に会ったとき、この名簿のことを知っているかと問うたところ、彼らは驚いて、そんなことは聞いたことがないと答えた。

後で、（全国組織工作会議の）小規模な集まりの席上、毛沢東は安子文を厳しく非難して、こう述べた。「組織部副部長たる君に、中央政治局の名簿を起草する資格があるのか？」安子文は誤りを認め、自己批判をした。毛沢東はそれ以上追及せず、「この出来事はここだけに留めて、他に拡散してはならない」と言った。

高崗の事件があってから、この名簿は高崗が安子文に作らせたもので、事前にそれを見た後で、饒漱石に密告したのだと言う者が現れた（高崗が自作自演したと言外に仄めかしている）。また、安子文が起草した名簿には、林彪の名があり、「有薄無林」は、高崗による完全なでっちあげであり、彼は下心があって、そう言ったのだと述べる者もいる。」⁽²⁴⁾

趙供述書に書かれる以上の内容は、毛・周・鄧起訴状や鄧講話と大きく異なっている。これまで、安子文の作った名簿は 1953 年 3 月に書かれ、林彪の名はそこに確かに記載されており、高崗は「有薄無林」という「嘘の証言」（周起訴状）をしたのだと語られてきたが、趙供述書によれば、この名簿の起草は 53 年 2 月に始まっており、しかも最初の起草者は安子文ではなく、劉少奇であり、起草を命じたのも、高崗ではなく、毛沢東その人だった。名簿は中央書記処の職掌分担を記しただけのものにすぎない。劉少奇は「3 月」にも関連名簿を書いたが、これといった目立った特徴はなかった。「有薄無林」名簿を高崗が目にするのは、その直後の「4 月上旬」で、それは毛沢東より機要秘書を通じて直々に送付された。

しかし、そもそも、毛沢東が 53 年 2 月に、中央書記処の組織問題に関する報告を書き、その名簿を作るよう劉少奇に命じたのは、いかなる動機に基づくものだったのか。

6. 劉少奇はなぜ中央書記処の分担名簿を作成したのか

『劉少奇年譜』は 1952 年の件に、以下のように書いている。

「9 月 30 日：中共中央代表団を率いて北京を離れソ連に赴き、ソ共第 19 回全国代表大会に参加する。10 月 2 日にモスクワ到着。5 日、ソ共 19 回大会が開幕。8 日、劉少奇が大会にて挨拶し、中共中央の祝辞を代読する。14 日、ソ共 19 回大会が閉幕。

10月9日：ソ共中央書記処のマレンコフに以下の書簡を出す。「本日、『プラウダ』が、ソ共19回大会での私の挨拶を公表した際、私を中共中央総書記であると注記したことに対し、個人として次の声明を行う。中共中央には現在、総書記なる職位はない。党の中央委員会、政治局、書記処はいずれも、毛沢東同志の指導のもと、毛沢東同志を主席としており、私は中央書記処の書記の1人である。私は党内問題への関与が、他の同志よりも、少しばかり多いにすぎない。中共中央には秘書長の職務があり、この職務は中央委員会の行政事務を管理する。これまでは任弼時同志が担当し、任弼時同志が逝去してからは、私が代理を務めている。この職務は、各国兄弟党の総書記の職務とは異なるものである。」⁽²⁵⁾

すでに述べたが、毛沢東は、過渡期の総路線に関するモスクワの認可を得るため、1952年8月15日から9月22日まで、周恩来を首席代表、陳雲、李富春、洛甫（張聞天）、粟裕を代表、王鶴寿、陳郁、宋邵文を顧問とする代表団をモスクワに派遣し、同年9月30日から10月30日までは、ソ共19回大会参加を名目に、劉少奇を首席代表、饒漱石、陳毅、李富春、王稼祥、劉長勝を代表とする代表団を再び派遣した。スターリンは、この2つの代表団が携えた過渡期の総路線の原案に異論を述べ、工業総生産額の年間目標値を高く設定しすぎていると非難した。このとき、自分に匹敵する共産主義世界の指導者たらしとする毛沢東の強い意思に脅威を感じたスターリンは、毛沢東と中共指導者の間にくさびを打ち込もうとした。10月9日付『プラウダ』に、劉少奇のソ共19回大会での挨拶を掲載する際、劉少奇の肩書きを「総書記」と記したのである。モスクワは、当時の中共中央書記処に総書記なる職位がないことを承知していた。『プラウダ』記事はたんなる誤記ではなく、モスクワが劉少奇を毛沢東と同等の最高指導者として遇する用意があることを中共中央に伝えるものだった⁽²⁶⁾。

身に降りかかった意想外の厄災に関して、劉少奇の対応は冷静かつ沈着であった。中共中央に総書記なる職位がないこと、自分は中央書記処の一書記にすぎないこと、急逝した任弼時の秘書長の代理職務という肩書きのみ、他の書記より余計であることを丁寧に説明したのである。

だが毛沢東は、これだけの説明では納得しなかった。1953年1月11日に帰国した劉少奇は、中央書記処の職務分担を再検討したうえで、新しい職掌

案を作るよう命じられた。張戎は、これが毛沢東の「劉少奇に対する解任の脅し」であったと解釈している⁽²⁷⁾。趙供述書にあるように、この命令は「1953年2月」になされた。だが2月末、劉少奇は病に倒れる。盲腸の手術で入院したのである。スターリンが3月5日に急逝した折も、毛沢東はスターリン弔問、追悼集会といった関連重要行事の参列者から劉少奇をすべて外した。『劉少奇年譜』には、こうある。

「1953年3月上旬：病により入院。(3月)28日、毛沢東に書簡を送り、身体が旧に復したので、月曜日から公務に復帰できると告げた。」⁽²⁸⁾

1953年のカレンダーを繙けば、3月28日は土曜日に当たる。劉少奇が中央書記処と政務院公務に復帰した「月曜日」は、だから3月30日を指す。趙家梁供述書は、「1953年2月」、劉少奇が中央書記処の分担責任者の名簿を提出した後、「3月」に、「中央委員会の各部門における指導人員分担名簿を起草し、高崗の意見を求めた」と記すが、この「3月」は、3月30日か31日の、いずれかを指すものと見なければならない。

高崗は、このとき劉少奇が提出した中央委員会の名簿に大した興味が持てなかった。これまでの人員を並べ直しただけの平凡きわまるものを感じたからである。そのことを本人に伝え、毛沢東にも報告した。ところが、直後の「4月上旬」になって、高崗事件の引き金となる「有薄無林」名簿が、毛沢東の機要秘書から極秘で高崗に届けられたのである。毛沢東は、この名簿の作成者が誰かを高崗に明かすことはなかったが、高崗は、一読して、それが劉少奇の発案になるものと確信した。名簿を書いたのが安子文であるとは、「後から知った」ことだった。

名簿の真の作者が劉少奇であると高崗が直感したのは、この「有薄無林」名簿が現れる直前の3月30日もしくは31日に、劉少奇が作った中央委員名簿を見せられていたからである。繰り返せば、そのときの名簿は現有委員をただ並べ換えたにすぎなかった。この最初の名簿には、薄一波のほか、林彪の名も書かれていたため、特段の注意を引かなかったのだ。劉少奇のこの最初の名簿は、高崗経由で毛沢東に報告されている。次いで、いかなる経緯によるものかは不明だが、劉少奇の部下である安子文が、長く病氣療養を続ける林彪を外し、薄一波を入れた名簿を4月上旬に作った。それを毛沢東の機

要秘書から見せられた高崗は、前回とは一転して、この名簿が劉少奇の派閥（高崗はそれを「白区（旧国民党支配地域）の党」と呼んだ⁽²⁹⁾）を拡張させる政治的野心を持つものと看做し、激しい義憤を感じたのである。

だが高崗は、名簿の真の作者が劉少奇であるという自分の直感を最後は捨てた。安子文がこれを書いたことを「後から知った」からだ。「後から」と記すが、それは1953年7月24日のことであった⁽³⁰⁾。この日、全国財經工作會議の指導小組會議で、安子文は、くだんの名簿を上級の許可なく無断で作成したことを自己批判したうえで、組織部副部長の職位を解くよう申し出たのである。

7. 安子文の名簿には林彪の名があった

1955年の中共全国代表者會議（3月21～31日）において、安子文は、53年の中央委員・各部名簿の作成顛末について、こう振り返った。

「1953年3月のある日、高崗が私（安子文）にこう言った。昨日の晩、毛主席に呼ばれて話をしたが、二つのことが話題になった。一つは、政治局の成員を改組せねばならないこと。二つは、中央の各部の組織を強化することである。この二つの問題に意見はあるかと問われたが、事前に何の準備もなかったもので、この問題については、主席と次に話をする際、自分の考えを述べたいと応えた。そのとき、高崗が私の意見を聞くことはなく、私の方もこれといった意見を述べることがなかった。習仲勲と劉瀾濤をどう思うかと高崗に問われたので、どちらも素晴らしい同志だと答えた。高崗は、彼らと自分が同郷だから、彼らが素晴らしいと言うのではなく、彼らは確かに若く、まっすぐで、経験があり、能力があるのだ。これからは、彼らのような人たちが仕事をする事になると言った。

そのころ、中央が事務組織を強化し、新しい部署の増設を考えているのを知ったが、まだ高崗を盲目的に崇拝しているときだったので、高崗とその話をした後に、中央政治局の名簿と中央各部の主な責任者の名簿を作ってみた。

名簿ができて、高崗に電話すると、彼はすぐに私の家までやってきた。私は名簿を彼に見せ、これが自分の考えだから、毛主席と話をする際の参考にしてほしいと説明した。

私が起草した中央政治局の名簿は12人で、書記処の5人、すなわち毛沢

東、劉少奇、周恩来、朱徳、陳雲；6人の中央局書記、すなわち高崗、彭徳懷、林彪、鄧小平、饒漱石、薄一波；別に鄧子恢同志を加えた。そのほか、用紙の片隅に、8人の名前を記した。董必武、林伯渠、彭真、張聞天、康生、李富春、習仲勲、劉瀾濤である。（中略）中央各部の指導的同志の名簿については、以下のように起草した。宣伝部は劉少奇が部長を兼任し、楊尚昆を副部長とする；組織部の部長は饒漱石、副部長に張鼎丞、蔡暢、鄧穎超、賴若愚、胡耀邦などを増やす；政法・統戦工作部の部長は鄧小平が兼任；農村工作部の部長は鄧子恢；財經工作部の部長は劉瀾濤、秘書長は周恩来が兼任、副秘書長は康生と陳伯達。（中略）高崗はこの名簿をしばらく眺めていたが、特に意見は述べなかった。自分もこうした人事は考えていて、今度、主席に呼ばれたら、自分の意見を述べたいと語った。習仲勲と劉瀾濤は候補中央委員である以上、いかなる事由にせよ、推薦はできないと言う。楊尚昆はどうだろうかと聞くので、それは良いと応えた。高崗は、楊は理論があり、宣伝部の副部長が適任だろうと言った。

高崗が我が家を去った後、私はすぐにこの名簿を焼却した。

同じ日だったか、翌日だったか、饒漱石に話をする序に、私は、高崗とのやり取りのあらましを告げた。饒漱石もはっきりした態度は示さなかった。ただ一言、康生同志の身体は大丈夫かと聞くので、楊尚昆同志の話では、ずいぶん良くなり、もう少しで仕事に復帰できそうだと答えた。

以後、誰ともこの話はしていない。高崗が主席に話したかどうかについても、高崗に確認したことはない。

1953年7月（24日）、財經會議の指導小組會議の席で、饒漱石がこの出来事を話題にし、劉少奇、周恩来が、私にそれは確かなのかと詰め寄って、私に対する批判を展開したので、私は直ちに中央に書面で自己批判を送り、組織部の副部長の職責を解くよう請求した。中央は私の書面検討文を審査し、私に口頭警告の処分を下したが、その理由は、こうしたやり方では、党内の不和を招来する恐れがあるというものだった。7期4中全会の後で、中央が招集した座談会の席上、私は、高崗がこの名簿を使って、多くのデマを流し、秘密裡にそれを広めて、各地で扇動工作をし、党を分裂させる活動を進めていたのを初めて知った。」⁽³¹⁾

この安子文の発言で注目されるのは、彼が作った名簿には薄一波のみなら

ず林彪の名も明記されていたことである。「有薄無林」名簿ではなく、「有薄有林」名簿であった。彼は、この名簿が「1953年3月」にできあがったと記す。劉少奇が中央書記処の分担責任者の名簿を書いた2月より後のことだ。劉少奇が病気療養中であったため、2月から劉少奇が着手していた名簿作成の仕事を引き継いだと見える。

劉少奇が2月に名簿作成を毛沢東に命じられて以来、4月上旬、高崗が「有薄無林」名簿を手にするまで、全部で4つの名簿が作られたことになる。そして、これら錯綜する名簿の出現順序は、

- (1) 劉少奇が2月に作った「中央書記処の分担責任者」名簿
- (2) 安子文が3月に作り、1955年の中共全国代表者会議で供述した「有薄有林」名簿
- (3) 劉少奇が病気回復後に起草し、3月30日もしくは31日、高崗に意見を求めた「中央委員会の各部門における指導人員分担」名簿
- (4) 毛沢東が機要秘書を通じて4月上旬に高崗に送り届け、高崗に劉少奇が書いたと直感させた「有薄無林」名簿

であったと考えられる。

安子文の中共全国代表者会議での発言にもある通り、高崗は(2)の「有薄有林」名簿作成を指示したのではない。その名簿に激昂してもいない。この日か、その翌日に「有薄有林」名簿の報告を受けた組織部長、饒漱石もまた名簿に無表情であった。2人の態度は当然のことで、党内の重要人物、林彪の名前がある以上、名簿に難癖を付ける必要はなかったからである。高崗が怒りを覚え、陳雲や林彪など親しい人々に説いて回ったのは、(4)の「有薄無林」名簿であって、(2)の「有薄有林」名簿ではなかった。しかしながら安子文は、1954年2月の7期4中全会後に開かれた高崗批判座談会で、自分の作った「有薄有林」名簿に林彪の名がないという「デマ」を高崗が流し、「党を分裂させる活動を進めていた」ことを聞かされたと言う。周起訴状もまた、高崗の名簿に関する非難を一刀両断に「嘘の証言」と切り捨てている。高崗の犯罪を告発する過程で、恐るべき事実関係のすり替えと歪曲が行われたことが分かる。

7月24日の自己批判で、安子文は誰にこの名簿を書くよう命じられたか

に全く触れなかった。これは意味深長である。安子文を問い詰めた劉少奇や周恩来も、その点を追及していない。だが、安子文に名簿作成を命じた張本人ははっきりしている。趙供述書はこう述べている。「毛沢東はなぜこの名簿を作るよう命じた者を深追いしなかったのだろうか？ 実際、彼には明々白々で、ことさらに暴露するまでもなかったからである。」⁽³²⁾

誠に、事態は「明々白々」であった。病氣入院中の劉少奇の仕事を安子文に引き継がせた毛沢東は、安子文が(2)の「有薄有林」名簿を3月に提出した後に、(4)の「有薄無林」名簿の作成も命じ、機要秘書を通じてそれを高崗の元へ届けた。高崗がそれを見れば、劉少奇の仕業と立腹することを十分に計算に入れたうえで、そうしたのである。

毛沢東こそは、(2)の「有薄有林」名簿と(4)の「有薄無林」の、二つの名簿作成の真の黒幕であった。

8. ベリヤ事件をきっかけに毛沢東は反撃に転じた

「有薄無林」と「有薄有林」の二つの名簿を使って、毛沢東は、劉少奇派と反劉少奇派の2大派閥の対立を煽り、過渡期の総路線が策定された後もまだ新民主主義の継続に固執する劉少奇、周恩来、陳雲たちに圧力をかけた。全国財經工作会議の3日目、1953年6月15日には、「新民主主義の社会秩序を確立する」、「新民主主義から社会主義に向かう」、「私有財産を確保する」という劉少奇と周恩来のスローガンを「右傾の表現」と断罪し、党内の劉少奇派に反対する姿勢を明確にした⁽³³⁾。しかし、その後、彼には想定外の出来事が起こった。ソ連のマレンコフ首相に次ぐ実力者のベリヤがスターリン個人崇拜の責任を問われ、6月26日に逮捕されたのである。ソ共はベリヤ事件の詳細を中共に通報し、併せ、中共幹部を至急モスクワに派遣するよう求めた。中共中央は高崗の派遣を決めた。

この高崗モスクワ派遣の詳細は、中共党史関係の書物からは長らく抹殺されたままであったが、ソ連解体後に公開された機密文書を使った研究論文、何祚康の編訳になる「毛沢東、高崗事件を語る（毛沢東談高崗事件）」『百年潮』2001年第12期、の発表以後、事態の片鱗が知られるようになった⁽³⁴⁾。このなかで紹介されたソ連側の文書のうち、特に重要なのは、1954年3月26日、ソ連大使のユージンが、53年12月23日に銃殺刑に処されたベリヤの問題に関して毛沢東と交わしたやり取りを記した「ユージンと毛沢東の談

話記録：高崗事件と党内団結」である。

「毛沢東が続けてこう言った。高崗はベリヤ逮捕を受けてモスクワに飛び、帰国してから、その活動がきわめて活発になった。明らかな事実は、彼がソ共中央の2つの最重要決定を、誰にも伝えなかったことだ。それは、個人崇拜の危険性の宣揚、および党内の集団指導の重要性に関する決定である。もう一つの事件も、彼の陰謀の典型的事例である。モスクワから帰って、高崗はまっすぐに帰宅することなく、各省から北京に出張中の党員幹部が投宿する北京飯店に赴き、彼らの間に工作を展開したのだ。高崗・饒漱石反党集団は、こうした戦略を用いて秘密活動を進め、毛沢東と林彪を擁護すると称して、まず劉少奇と周恩来を打倒することに着手した。」⁽³⁵⁾

1953年6月26日にフルシチョフが招集した政治局会議でベリヤが逮捕された件につき、高崗はクレムリンの新しい指導部から詳しい事情説明を受けて7月初め、帰国した。しかし、毛沢東がここに記す通り、帰国後、高崗は異様な行動に出た。自宅には直行せず、「各省から北京に出張中の党員幹部が投宿する北京飯店に赴き、彼らの間に工作を展開した」のである。高崗がこのとき北京飯店で展開した「工作」とは、全国財政工作会議参加のためそこに宿泊していた大行政区と軍隊の指導者20～30人に、北京の西山で静養中の林彪を慰問するよう働きかけることであった。この事実は、先述の通り、趙供述書にも記されている。だが、「北京飯店」での高崗の工作を、西山で静養する林彪慰問に結びつけて、自分に対する反逆の予兆を見て取ったのは、毛沢東その人にほかならない。大行政区や軍隊の指導者と林彪の間の話し合いに、毛沢東がどのような感想を抱いたかについて、趙家梁はこう書いている。

「高崗と部隊指導者との頻繁な接触、とりわけ今回、高崗が多く的高级将校と集団行動を採ることを、毛沢東は事前に知らされなかったため、高崗、ひいては林彪や高级将校の一部に対して、毛沢東は疑惑と高度な警戒心を抱くことになった。彼らは私に隠れて何を企んでいるのかと。このように説く者がいる一方で、高崗と部隊指導者が林彪と会談することは、毛沢東がまさに望んだこと、いや毛沢東の認可や支持さえ得ていたと言う者がいる。いずれが真相かは判らぬ。しかし、毛沢東が本当に何も知らなかったとしても、

高崗事件が起こった後、さらには林彪事件が起こった後では、誰かがこのことを告発していたはずなのだ。ところが半世紀の間、毛沢東を含め、誰1人として、それに言及することがないのは、一体なぜなのか？」⁽³⁶⁾

確かに、高崗と高級将校の林彪慰問を、毛沢東が事前に仕組んだものか否かを判断することは難しい。だが、この出来事の前後で、毛沢東の高崗事件に対するスタンスが一変したことは間違いない。もっとも、そうであればなおのこと、高崗事件や林彪事件が起こった後になっても、この出来事を誰も告発しようとしなかった理由が分からなくなる。ソ連の中国大使ユージンに真相を打ち明けた以外、毛沢東が死ぬまでこの件に沈黙を貫いたのは、なぜだったのか。ここまで示した文献だけでは、その謎は解けない。この難問の究明はひとまず措いて、その後が起こった事態を追跡してみる必要がある。

1953年7月初め、高崗が軍部の高級将校に働きかけ、林彪を首脳に戴いて、劉少奇を打倒する運動に着手しようとしたとき、毛沢東は、この動きが劉少奇への抗議活動を越えて、自分の覇権に対する脅威に転換する危険を痛烈に感知した。彼は、高崗を手駒にして劉少奇と周恩来を追い落とす計画を軌道修正する必要に迫られた。

7月11日、毛沢東は、周恩来に、全国財經工作会議の指導小組会議を、規模を拡大したうえで挙行し、懸案である薄一波の「公私一律」の税制改革方案について、より多面的に議論するよう指示した。このとき毛沢東は、林彪を自分の陣営に引き戻そうと試みたが、不首尾に終わったようである⁽³⁷⁾。そこで次善の策として、劉少奇に対する態度表明において、まだ旗幟を鮮明にしていない2人の指導者、鄧小平と陳雲を仲間に取り込むことにした。『周恩来年譜（1949-1976）』1953年7月下旬、『毛沢東年譜（1949-1976）』53年7月25日の件には、それぞれこうある。

「7月下旬：全国財經會議に現れた問題に対処し、後半の會議を順調に進め、より良き結果報告を得るために、毛沢東は周恩来に「援軍」を呼ぶよう指示し、陳雲と鄧小平を北戴河から戻して、會議に参加させた。7月27日、陳雲が帰京し、28日夜、周恩来は陳雲、薄一波と話し合った。29日、30日も、2度にわたり朱徳、陳雲、高崗、李富春などと話し合いをした。8月3日、鄧小平が帰京した。」⁽³⁸⁾

「7月25日：午前、（毛沢東は）陳雲と話し合った。陳雲は北戴河の休暇を切り上げて、23日、北京に戻っていた。8月3日、鄧小平が北戴河の休暇を切り上げ、北京に戻った。彼らは毛沢東の「援軍」の指示に基づき、帰京して全国財經工作會議に参加した。」⁽³⁹⁾

『陳雲年譜（1905-1995）』によれば、陳雲は、安子文の名簿問題を劉少奇と周恩来が追及した7月24日の指導小組會議に出席した後、7月25日、毛沢東と一対一の話し合いに臨んだ。陳雲は、薄一波のここ数年の中央財經工作における成果を帳消しにすることはできず、「2つの路線の闘争」という批判の方法には賛成できないという立場を公にすると述べた⁽⁴⁰⁾。この日、彼は毛沢東の密偵となったと思われる。8月3日には、鄧小平も密偵となることを約束した。8月6日、2人は指導小組會議で発言し、薄一波に対する批判を「路線闘争」とすることに正式に異議を唱えた。「陳雲、鄧小平同志の発言によって、會議の雰囲気は変化した。」⁽⁴¹⁾

そして8月9日、人々を驚かせる事件が起こる。周恩来の結論講話を採択する際、毛沢東が高崗の過去の所業を激しく批判したのである。

薄一波の批判が不十分だと論難する高崗を、このとき毛沢東が制止した。

「高崗同志、君の態度はそれで良いのか？ 君は中央に手紙を書く権利がある人間にそれを許さなかったではないか。東北の工作を検討することが、なぜいけないのか？ 東北各省で誤りが生じたとき、君たち東北局は批判や検討を行わなくても良いと言ったのではなかったか。」

高崗はなお薄一波を睨みながら、「主席、薄一波の誤りの性質は、我々東北のものとは違います。……」

毛沢東は顔を俯け、一喝した。「自己弁護は止めないか！」⁽⁴²⁾

2人のやり取りの背後には、次の事情があった。1952年1月、高崗の管轄下の東北鞍山市共産党委員会書記と東北局党校教育処長が、薄一波に毛沢東宛て書簡を言付けた。高崗やその他の幹部の腐敗汚職問題を告発するものだった。同年8月、鞍山鉍山でガス爆発事故が起こり、中央財政委員会と中央監察委員会の合同調査の結果、東北局は事故の責任を問われることになった。だが高崗は、一連の出来事を薄一波の東北局に対する故意の攻撃と見て、中

央が当該書簡を検討することに反対した⁽⁴³⁾。毛沢東は財經會議でこの件を取り上げ、公衆の面前で容赦なく高崗を詰問したのである。彼は高崗から距離を置き始めていた。

8月11日に全国財經工作會議が閉幕した後、薄一波は中央財經委員会副主任、財政部長を罷免された。その後任は、意外なことに、財經會議を長く欠席していた鄧小平であった。

毛・周・鄧起訴状、鄧講話は全て、1953年10月3日～11月1日の高崗による南方遊説活動を経て、党と国家の権力篡奪計画が初めて明るみに出たと記す。そして、毛沢東がその指導を後進に明け渡すという最高権力委譲の方針を「1953年末」に示した際、鄧小平と陳雲の2人が高崗・饒漱石の反党陰謀を毛沢東に密告し、毛沢東と中共の危機を救ったと述べる。だが、毛沢東が高崗の邪悪な企みを知ったのは、これよりも早く、高崗がベリヤ事件報告をモスクワで聴取して帰国した際であった。高崗は、軍部に高い威信を有する林彪の周りに、大行政区や軍隊の指導者を結集させようとした。軍事力を背景とした新たな派閥の形成は、毛沢東にとっては、劉少奇派より何倍も脅威に感じられた。かくて毛沢東は、高崗・饒漱石に対する反撃の狼煙を53年7月11日に上げた。林彪の説得に失敗すると、鄧小平と陳雲の2人を、高崗と饒漱石を監視し牽制する影の諜報員に抜擢した。

毛沢東は、鄧小平や陳雲の密告によって高崗・饒漱石の反党陰謀を知ったのではない。むしろ、鄧小平や陳雲の方こそ、北戴河から北京に呼び戻された段階で、毛沢東の口から、高崗・饒漱石の反党陰謀の概要を告げられたのである。中共の危機を救ったのは、鄧小平や陳雲ではなかった。毛沢東こそ、危機の救済者である。いや、この言い方には語弊があろう。危機を救済したというよりは、毛沢東が、自らが作り上げた危機を、再び自らの手で回収したと言うべきである。

史実をこのように整理することで、私たちは、林彪事件が起こった後でさえ、1953年7月初めの高崗たちの林彪詣でを、毛沢東を含め党内の誰もが告発しようとしなかったのは何故かという、趙家梁が発した疑問に答えを出すことができる。

高崗たちの林彪詣でを告発しようとするれば、高崗・饒漱石の反党陰謀がこのとき暴かれたことを認めねばならない。そうすると、鄧小平や陳雲が、これ以後、年末にかけて、高崗・饒漱石を監視し牽制する毛沢東の密偵の役割

を果たしたことも認めざるを得なくなる。鄧小平と陳雲は、毛沢東と中共の危機を食い止めた救世主ではなく、党員の動静を探るミッションを毛沢東から授けられた諜報員へと矮小化される。高崗事件の後、8期1中全会（1956年9月15～27日）において、鄧小平が中央書記処総書記に、陳雲が党副主席にそれぞれ任命されたのは、彼らの密偵活動に対する毛沢東の報奨でなくて何であろうか。中共全国代表者会議での高崗事件の報告は元来、周恩来を中心にまとめられたものだが、これが直前になって「周恩来の盲腸炎の手術」⁽⁴⁴⁾を理由に、鄧小平へと報告発表者が変更されたのも、密偵としての彼の働きに花を添える毛沢東の配慮からであった。鄧小平と陳雲が5か月の間、密偵活動を続けたことには、当人のみならず、2人を改革開放の旗手に推戴した他の党員たちもまた良心の呵責を感じていた。彼ら全てがこの秘密を誰にも明かさないまま墓場まで持っていったのである。

それにしても、鄧小平と陳雲が、高崗・饒漱石の秘密を暴き、党の危機を救ったと主張する「1953年の秋と冬」に起こったこととは、一体何であったのか？

9. 陰謀を持ちかけたのは高崗か、それとも陳雲か？

趙供述書は、高崗が最も信頼した仲間の1人に陳雲を挙げている。1946年5月、高崗は林彪、羅榮桓とともに、陳雲を東北局の副書記に推薦した。52年10月8日に北京で仕事を始めてからは、ほぼ毎日、陳雲と国家計画委員会に関する意見交換を行った。高崗は、陳雲を「陳聖人」と呼んで、心酔していた⁽⁴⁵⁾。

趙供述書は書いている。

「1953年の初夏、毛沢東は一再ならず、自分は年老いてしまい、身体の調子も良くないから、「万が一、私が不在になった場合、どう対処すべきか」といった話を、高崗に説いたし、他の者にも説いた。」⁽⁴⁶⁾

「このとき高崗は、毛沢東の憂慮や、総書記設置などに関する自分の考えを、陳雲に告げた。

陳雲はこう述べた。「総書記の設置は確かに望ましくない。今よりたくさんの副主席を置くべきだ。君が一つ、私が一つ、2人とも参加すれば良い。」

高崗は膝を打った。「そうだね、このやり方は良い。そうすれば、彼ら（劉少奇や周恩来）は毛主席を飾り物にすることができなくなるだろう。」

（劉少奇の 1929 年の投降事実を示す）敵（国民党）檔案の調査を毛沢東が（1952 年末に）高崗に命じたことを振り返りながら、2 人は、劉少奇が過去においても立場が一定せず、中央の舵取りができなかったのみならず、現在でも、政治面で毛沢東の疑念を招いており、後継者としては失格だと考えるにいたった。

陳雲はこう言った。「どうやら、主席にとって後継者問題とは、党と国家の未来に関わる大事であるとともに、片時も念頭を去らない大事でもあるようだ。けれども、主席が自分から前面に出るわけにはゆかないから、我々は今や主席がこの問題を解決するのを手伝い、主席の心の病を取り除かねばならない。」

では、誰がその先頭に立つのか？ 2 人は、その任に耐えるような幾人かの人物を検討した。朱徳は人格、声望ともに高く、最も理想的だが、年齢が高すぎるのが惜まれる。林彪は若く、統率力もあるが、多病で、建国後は長期間、療養しており、ほとんど表に出ず、抗美援朝（朝鮮戦争の中共側の呼称）の責任者も辞退した以上、それ以上の重責には耐え得まい。他に誰がいるだろうか。高崗は言った。

「陳雲同志、私は君が先頭に立つのが最適だと思う。」

陳雲は手を振って言った。「私では無理だ、君のほうが私より適任だよ。君の政治資本は、私より大きい。君には陝甘寧辺区があるし、毛主席は君を信頼し、君を支えている。君は、軍隊、地方、いずれでも活動の余地があるのだから、彼らの支持を得られるなら、君が先頭に出るのが一番良い。恐れることなど何もありません！」

高崗は俯いたまま熟考していた。

陳雲は重ねて言った。「まず君が立ち上がることだ。毛主席に事前に話しておく必要はない。事態が確実になってから話しても遅くはない。」「時機がきて、トップ（劉少奇）が倒れ、君が造反しないなら、私が造反しよう！」⁽⁴⁷⁾

この趙家梁の記述は、高崗が 1954 年 2 月 17 日の自殺未遂の直前に記した遺書の一節である。毛沢東に宛てて文章を綴る高崗の心の片隅に、自分を最

後に裏切った陳雲を貶めようという気持ちがなかったと言えは嘘になろう。しかし、ここで注意すべきなのは、複数の副主席を置く方案に対して、まず陳雲の方から、「君が一つ、私が一つ」という呼びかけがなされた点だ。すでに見たように、この問題について、1980年の鄧講話は、高崗の側が新設の副主席ポストを陳雲と2人で占めようと持ちかけたと言っていた。しかし、高崗の遺書によれば、事態は全く逆で、副主席設置の議論をリードしたのは陳雲の側であった。

それだけではない。鄧講話は、この問題が議論されたのが、「毛沢東同志が1953年末に中央を1線と2線に分けてから」の時期だったと書いた。毛沢東による中央指導機構の「1線と2線」化の提案は、その明確な起点が、今もって不明である。権威ある欽定版評伝『毛沢東伝（1949-1976）』（上）は、「全国財經會議の後」と述べる⁽⁴⁸⁾が、そう考える根拠となる文献を示さない。仮にこの記述が正しければ、「1線と2線」論は、53年8月以後に出されたことになる。だが今確認したように、趙供述書は、この議論が「1953年の初夏（恐らく4月）」、つまり「有薄無林」名簿が送られたころになされたと言う。鄧講話の述べる「12月末」は、これら2説よりも、ずっと後のことだ。以上の諸説の当否を確認するためには、より確かな状況証拠が必要である。果たして、趙供述書は別の箇所でこう述べている。

「毛沢東は高崗に言った。自分は南方に少しの間（1953年12月24日～54年3月17日）、休暇に出かけたいが、中央の工作は劉少奇が議長となるのが良いか？ それとも議長は持ち回りが良いか？ まず君から何人かに打診してほしい。

高崗はすぐに陳雲を捕まえて相談した。

陳雲には心の準備がなかったので、頭をひねりながら、こう応えた。「これまでの慣例に照らせば、主席が病気か出張の場合は、全て劉少奇が中央の工作を主宰してきた。今回、主席が議長の持ち回りを提案したことには、何か別の配慮があるのだろうか。」

「まさに、それなのだ。主席は劉少奇をもはや信頼していないのだから、彼を議長にしようとするはずがないのだ。」高崗は竹を割ったような、あけすけな物言いをした。

陳雲は、この発言にすぐさま反応せず、一呼吸置いた後に、こう言った。

「持ち回りでも良いと思う。」

1953年12月15日、中央は小規模な会議（『毛沢東年譜（1949-1976）』第2巻は、「中央書記処拡大会議」と称する。劉少奇、周恩来、朱徳、陳雲、鄧小平、高崗、彭徳懷が参加⁽⁴⁹⁾）を開いて、このことを検討した。毛沢東が言った。「今日の議題はただ一つである。私は北京を出て少しの間休養したいのだが、中央の工作は、劉少奇同志に主宰してもらうか、それとも書記処の何人かの同志で議長を持ち回りとするか、皆の意見はどうだろうか。」

周恩来が最初に意見表明した。「これまでの慣例に照らせば、主席が北京不在のときは、全て劉少奇同志が議長を務めてきましたから、今回もやはり劉少奇同志に議長をお願いするのが当然です。」

劉少奇が言った。「それは良くない、それは良くない。議長は持ち回りにすべきでしょう。」

高崗が直ちに応じた。「私は持ち回りに賛成です。持ち回りが良い。」

次に、鄧小平と陳雲が劉少奇を議長とすることに賛成した。朱徳、林伯渠、饒漱石などは持ち回りに賛成した（この記載は誤り。林伯渠、饒漱石は会議不参加）。毛沢東はすぐには意見を統一できないと見て、「このことは今日決めるのではなく、後でもう一度議論しよう」と言った。

散会后、皆は会議室を出て、三々五々、停車場に向かいながら、議論を続けた。高崗は鄧小平の傍に近付いて、「劉少奇は政治面に問題があるから、中央の工作を主宰すべきではなく、持ち回りの方が良い」と語った。彼はさらに、周恩来の政策立案は劉少奇よりは妥当であるとも言った。

鄧小平はこう反論した。「劉少奇の地位は歴史的に形成されたものだから、彼を議長とすべきである。」

元来、中央の会議において異なる意見を出すのは正常なことであり、問題の決定がなされない前に、指導者の間で引き続き意見を交換するのも正常なことである。にもかかわらず、鄧小平は毛沢東に、高崗が「非組織的な活動を進めている」、「高崗は私を捕まえて談判し、私を籠絡しようとした」と報告したのだ。

高崗は自分の批判座談会（1954年2月15～25日）において、鄧小平の自宅に行ったことを否認して、自分は鄧小平の自宅がどこにあるかも知らないと述べた。自己批判の際も、自分は鄧小平の自宅を訪問したことはなく、鄧小平と当該問題を議論したのは、この一度切りだと述べた。

陳雲が会議の席上、突然豹変したことは、高崗をこの上なく立腹させた。会議の後、彼は陳雲の自家用車に乗って、陳の自宅まで行き、こう問い質した。「議長の持ち回りが良いと、君は言ったではないか？ どうして言ったことを守らないのか？」2人は激しく言い争い、気まずい思いで別れることになった。陳雲はしばらく考えた後で、高崗がこのまま突っ走ってしまえば、大変危険なことになると考えるにいたった。

かくて、陳雲は周恩来に、高崗が「非組織的な活動を進めている」と密告した。高崗が平時、彼に話してきた劉少奇に対する批判の言辞も伝えて、こう述べた。高崗は私を味方に引き入れようと、私に高位高官を約束して、「君が一つ、私が一つ、2人とも副主席になれば良い。……」と述べたと。それにしても、陳雲はなぜ毛沢東に直接訴えるよりも前に、周恩来に報告したのだろうか？

周恩来は聞き終わると、しばらく沈思した。彼は陳雲が万事慎重な人物であることは判っていたが、それでも彼にこう言い含めた。「ことは大変重大だから、ここだけに話を留めるように。」

陳雲を送り出した後、周恩来は直ちに毛沢東に報告に及んだ。⁽⁵⁰⁾

以上の趙供述書の記述を通じて、毛起訴状に「こうした陰謀、陰謀家、陰謀集団を、我々は1953年の秋と冬にようやく突き止めた」と書かれた事件が、53年12月15日開催の中央書記処拡大会議をクライマックスとするものであることが判明する。しかし、鄧起訴状が、「彼の反党宣伝を聞いた多くの同志が、中央に彼の罪惡に満ちた陰謀を告発した」と訴えたような類の造反では全くなかった。高崗は劉少奇が毛沢東の外遊中、中央工作の議長を務めることに反対し、他の書記による輪番制を提案したにすぎない。この意見表明を「反党宣伝」、「罪惡に満ちた陰謀」と非難することは的外れである。それは、会議が終わってから皆が停車場まで向かう途中で、高崗と鄧小平の間に交わされた「立ち話」でのことだし、陳雲の自家用車に乗って彼の自宅まで高崗が押しかけたのは、陳雲が会議当日になって突然、輪番制賛成の立場を放棄した真意を確認するためであった。

7月25日以後、陳雲は高崗の意見に賛成する振りをしながら、彼の活動をますます過激化させるよう密かに画策していた。高崗は10月3日から11月1日までの休暇申請先を、最初は古巣の東北地方に決めていた。それを林

彪が静養する杭州を中心とした南方に変えてはどうかと言ったのは、陳雲であった。趙供述書は、陳雲の勧誘の言葉を記録している。「ちょうど林彪総司令が杭州にいるから、君はこの機会に彼に会って、彼の意見を聞くことができる。その後で、広州まで回って、別の何人かとも会えば良い。」⁽⁵¹⁾ 毛沢東が劉少奇を自分の外遊中の中央工作の議長にすべきか否かを高崗に打診した際も、陳雲を自らの盟友と信じる高崗は、議長持ち回りのアイデアを陳雲にだけ打ち明けた。陳雲はやや躊躇ってみせた後、高崗の持ち回り案に賛成した。この態度表明が陳雲の陽動作戦であることを高崗は知らなかった。12月15日の中央書記処拡大会議の閉会后、高崗が陳雲の自宅まで出向いて盟友と信じた彼の心変わりを責めたことに、我々は高崗の大きな失望と動揺を読み取ることができるのである。

「君が一つ、私が一つ」という提案が最初に高崗から出されたという嘘の情報を、陳雲はまず周恩来に流した。毛沢東は、周恩来経由で、その詳細を知った。鄧小平が1981年になって初めてこの証言を公開したのは、陳雲による密告を自分のそれと結びつけ、改革開放後の中国政治に対するイニシアチブを、陳雲とともに確保するためであった。

鄧講話は、「西南（鄧小平）に対しては、勧誘という方法で、私と正式な交渉を行い、劉少奇同志が未熟だから、私と彼（高崗）とが協力して劉少奇同志を打倒しよう」と高崗から切り出されたと書くが、これほど重大で込み入った勧誘が、12月15日の中央書記処拡大会議後の「立ち話」のわずかな時間になされたとは考えられない。「立ち話」のなかで、高崗は、議長役を「持ち回り」にしようと言ったのであって、「劉少奇同志を打倒しよう」と誘ったのではなかった。その証拠に、「林彪の支持を得て、彼はようやく、あのよう奔放に振る舞うことができた、」「4つの大行政区の支持も得たものだから、頭が眩んで方向を転換したのである」という鄧講話の1節は、高崗未亡人、李力群が見たバリエーションでは、「彼（高崗）はまず林彪の支持を得、彭徳懷同志の支持も得たので、このように奔放に振る舞うことになったのだ。当時の6大行政区のうち、彼は4つの大行政区の支持を得た」という文章であったという⁽⁵²⁾。こちらの方が、はるかに真に迫っている。林彪に匹敵する声望を有する彭徳懷もまた高崗シンパであると知って、毛沢東はさぞ浮き足立ったに違いない。鄧小平の告発が「立ち話」の内容に留まらず、毛沢東の密偵となった8月3日以後の総合的な調査に基づいたものであることを、

このバリエーションは良く示している。

毛沢東、鄧小平、陳雲の年譜を相互に参照すれば、鄧小平と陳雲が毛沢東に高崗の陰謀を密告した後、毛沢東を中心に高崗を陥れる共同謀議がなされる経緯は次のようなものであった。

12月16日午後、鄧小平が毛沢東宅で高崗の反党活動を密告した。

12月17日早朝、毛沢東が周恩来と話をする。周恩来は、陳雲が自分に高崗の反党活動の詳細を報告したことを伝えた。午後5時30分、鄧小平と陳雲が毛沢東宅に呼ばれ、高崗事件への対応を協議した。夜8時には、周恩来が話し合いの場に呼ばれた。

12月18日夜、周恩来、鄧小平、陳雲、彭徳懷が毛沢東宅に呼ばれ、高崗事件への対処で共同歩調を取ることを確認した。彭徳懷は高崗支持の姿勢を撤回した⁽⁵³⁾。

自分を「陳聖人」と呼んで心酔した高崗を陳雲が無慈悲にも裏切った後、鄧小平はこの裏切りに便乗し、毛沢東とともに高崗事件なるものを作り上げた。その鄧小平が高崗事件の名誉回復に動くことなど、どだい無理な話であった。

ここにたって、我々は「1線と2線」の議論が提出された時期に関するこれまでの議論の混乱に決着をつけることができる。「1線と2線」論が置かれた文脈は、1953年初夏（4月）と12月とでは全く違っていたのだ。初夏の提案は、文字通り、党と国家の指導体制をどう編成するかという大きな文脈からなされた。しかし12月の提案は、毛沢東が中央の会議を主宰できない非常事態において、臨時の議長役を誰にするかという課題に限定されている。毛沢東が1線から2線に退くという体制改革の意気込みが、そこには微塵も見受けられない。

毛・周・鄧起訴状や鄧講話が、「1線と2線」論は「1953年の秋と冬」になされた執拗に主張する理由がここから明らかになる。それは、言葉の本来の意味での体制改革を目指す「1線と2線」論が、発案者の毛沢東によって途中で放棄されたことを隠すために仕組まれた言説なのだ。その放棄の時期は、ベリヤ事件の直後に、高崗・高級将校と林彪の連合派閥が形成の緒に就いたときであると考えられよう。毛沢東は、もはや体制改革ではなく、自

分の体制防衛で頭が一杯だった。鄧起訴状は、「水面下で、自分（高崗）を党中央の総書記あるいは副主席に就けるよう要求し、政務院総理の人選を換えて、自分をそのポストに充てるよう求めた」と書くが、毛沢東を1線から退かせる試みに高崗はそもそも無縁であった。薄一波もまた、その回顧録で、高崗の「私の反省」にある、「劉少奇を引きずり下ろし、自分を毛主席の唯一の助手に引き上げ、将来、指導者となる準備をした」というフレーズを拡大解釈して、「毛主席が劉少奇に「議会」（全国人民代表大会）をやらせ、周恩来に部長会議主席を担当させ、自分（高崗）に政治局をやらせる積りだと言った。だが、別のときには、周恩来が部長会議主席を担当することには反対だと述べて、林彪にやらせたいと言った。この意見を毛主席まで伝えるよう、陳雲同志に求めたが、陳雲同士の拒絶に遭った」と書きはしたものの、毛沢東を1線から退かせる高崗の「篡奪」計画を立証することはついにできなかった⁽⁵⁴⁾。

「1線と2線」論の体制改革としての意味合いを去勢してしまった毛沢東にとって、7月以来、高崗と不即不離の関係を続ける林彪を連れ戻す以外に、高崗に対する反撃を勝利に終わらせる途はなかった。林彪を「援軍」部隊に加えることに、毛沢東が7月11日の時点で失敗したのは、すでに述べた通りである。今度こそ、林彪を自陣に奪還せねばならない。こうして、林彪を高崗・高級将校の連合派閥から離反させる重大任務が、陳雲の手に委ねられることになった。

10. 最後の闘争：林彪奪還工作

『毛沢東年譜（1949-1976）』第2巻、1953年12月19日の条に言う。

「12月19日：夜、陳雲、鄧小平と話し合う。毛沢東は陳雲に、高崗が南方遊説した上海、杭州、広州、武漢まで行き、中央を代表して、高崗が遊説した関係責任者を招き、高崗が陰謀の手口を使って、劉少奇に反対し、党の分裂を企てている問題を通報し、高崗に騙されることのないよう求めてほしいと依頼した。毛沢東は、特に杭州で療養中の林彪には、こう伝えるよう頼んだ。「君が意見を変えねば、私は君と手を切る。君の方が折れない限り、君とは二度と連合しない。」」⁽⁵⁵⁾

陳雲は毛沢東の密命を携え、杭州にて林彪と会談した。『陳雲伝』は、そのときのやり取りを次のように記す。資料の出所は、1971年10月8日に提出された陳雲の「林彪に対する告発」である。ちなみに、この告訴状は、林彪事件（71年9月13日）を受けて関係者全員に発動された尋問調査記録の一部をなす。

「林彪は応えた。「この事件については、主席と君のほうが私よりずっと詳しい。私に異存はない。」林彪はまた、陳雲にこう問いかけた。「君が党の副主席になろうとは考えないのか？」陳雲は言った。「私はその任ではないし、なるべきでもない。」林彪は言った。「それなら、劉少奇以外に適任者はいないね。」林彪はこうも付け加えた。「高崗は自殺するだろうな。」陳雲はすぐに上海に戻って、林彪との会談状況を毛沢東に報告した。毛沢東は陳雲に問うた。「副主席は劉少奇1人で十分だという意味ではあるまい。周恩来は要らないとでも言うのか？」陳雲は言った。「劉少奇以外に推薦したい人物はいないという意味だと私は理解しました。つまり、林彪自身は副主席になる意思を持っておりません。』」⁽⁵⁶⁾

ここでもう一度、確認しておけば、高崗事件の後、鄧小平は中央書記処総書記になり、陳雲は党副主席になった。陳雲が前言を翻した例は「君が一つ、私が一つ」に留まらない。自分は副主席の任に耐えないという言葉、陳雲は後でまた反故にしたのである。

林彪は、毛沢東による副主席就任の誘いに乗らなかった。劉少奇以外に副主席に相応しい人物はいないと断言した。それでも、「周恩来は要らないとでも言うのか？」という毛沢東の問いかけが示唆する通り、周恩来を副主席に推薦しなかったことは、後で「林彪・四人組反革命集団」の罪状の一つに数えられた。

「高崗は自殺するだろうな」という林彪の予言は的中した。解放後、旧満洲国の領土を接收し、東北地方を発展の軌道に乗せる困難な仕事に、林彪、高崗、陳雲はともに従事した。林彪は高崗の強靱な自我を良く承知していた。強靱であるがゆえに、脆く崩れ去る倒壊の予兆をも感じていたに違いない。

高崗が大量の睡眠薬を飲んで2度目の自殺に成功するのは、陳雲と林彪の会話から半年以上が過ぎた1954年8月17日のことである。毛沢東に許しを

乞う遺書は、今回はなかった。夫人の李力群が最後に聞いた言葉は、「くそっ
たれ！」であった⁽⁵⁷⁾。

註

- (1) 【俄】亜歷山大・潘佐夫著、卿文輝他訳『毛沢東伝』下冊、中国人民大学出版社、2015年、594-595頁（原著はАлександр Вадимович Панцов, *Мао Цзэдун*, Моподая Гвардияб, 2012）。
- (2) 毛沢東「批判離開総路線的右傾觀點」『毛沢東選集』第5巻、人民出版社、1977年、81頁。
- (3) 周起訴状と鄧起訴状は、「周恩来同志關於高崗問題的座談會上的發言提綱」（1954年2月）、「關於高崗、饒漱石反黨聯盟的報告」（1955年3月21日）中国人民解放軍国防大学党史党建政工教研室編『中共党史教学参考資料』第20冊、国防大学出版社（内部出版）1986年、267-269頁、512-525頁。毛起訴状は、「在中国共產党全国代表會議上的講話」（1955年3月）『毛沢東選集』第5巻、138-156頁。
- (4) 『毛沢東選集』第5巻、150頁。
- (5) 『中共党史教学参考資料』第20冊、268頁。
- (6) 同上。
- (7) 『毛沢東選集』第5巻、147頁。
- (8) 同上、146頁。
- (9) 『中共党史教学参考資料』第20冊、516頁。
- (10) 同上。
- (11) 『毛沢東選集』第5巻、147頁。
- (12) 尹騏『潘漢年伝』中国人民公安大学出版社、1996年、348頁。
- (13) 余汝信『康生年譜（1898-1975）：一個中国共產党人的一生』新世紀出版社、2023年、143頁。
- (14) 同上、143-144頁。『潘漢年伝』256-257頁。
- (15) 中共中央文献研究室編『楊尚昆日記』中央文献出版社、2001年、1953年3月9日、3月10日、4月3日、1955年3月16日、4月1日、4月4日の各条（110頁、115頁、180-182頁）。『康生年譜（1898-1975）：一個中国共產党人的一生』203頁、205頁。
- (16) 『鄧小平文選（1975-1982）』人民出版社、1983年、257頁。
- (17) 趙家梁、張曉霽『半截墓碑下的往事：高崗在北京』大風出版社、2008年、99-100頁より転引。
- (18) 同上、134-135頁。
- (19) 中共中央文献研究室編『劉少奇年譜（1898-1965）』下巻、中央文献出版社、

- 116-117 頁。
- (20) 張文和、李義凡『走近劉少奇』中央文獻出版社、1998 年、253 頁。
 - (21) 陳大蒙、劉史『落井下石：重查高崗案』第 2 版、明鏡出版社、2008 年、369 頁。
 - (22) 『半截墓碑下的往事：高崗在北京』200 頁。
 - (23) 同上、113 頁。
 - (24) 同上、117-118 頁。
 - (25) 『劉少奇年譜（1898-1965）』下卷、304 頁。
 - (26) Jung Chang and Jon Halliday, *Mao: The Unknown Story*, Anchor Books, 2006, p. 550.
 - (27) *Ibid.*, p. 550.
 - (28) 『劉少奇年譜（1898-1965）』下卷、309 頁。
 - (29) 『中共黨史教學參考資料』第 20 冊、517 頁。
 - (30) 戴茂林、趙曉光『高崗伝』陝西人民出版社、2011 年、315 頁。
 - (31) 安子文「在 1955 年黨的全國代表會議上的發言（復印件）」（國防大學黨史黨建政工教研室資料室存）。我々部外者にはとうていアクセス不可能なこの機密文書は、林蘊暉『高崗、饒漱石「反黨」事件』香港中文大學出版社、2017 年、151-153 頁より転引した。
 - (32) 『半截墓碑下的往事：高崗在北京』119 頁。
 - (33) 「批判離開總路線的右傾觀點」『毛澤東選集』第 5 卷、81-82 頁。
 - (34) 当該論文は、タイトルと本文の修正を経て、以下に再掲された。何祚康編訳「高崗与莫斯科的關係：来自蘇聯的証拠」史鑑編『高崗「反黨」真相』香港文化藝術出版社、2008 年、134-140 頁。
 - (35) 「尤金与毛澤東談話記錄：高崗事件与党内團結」（1954 年 3 月 26 日）沈志華主編『俄羅斯解密檔案選編：中蘇關係（1954.2-1955.7）』第 5 卷、東方出版中心、2015 年、40 頁。同文書は、ABPPΦ（ロシア外交政策史料館）に収める。文書番号は、“ф. 06, оп. 13a, п. 39, л. 227, л. 1-5.”
 - (36) 『半截墓碑下的往事：高崗在北京』135 頁。
 - (37) 司馬清揚『周恩来与林彪』（上）、明鏡出版社、2012 年、85 頁。
 - (38) 中共中央文獻研究室編『周恩來年譜（1949-1976）』上卷、中央文獻出版社、2007 年、316 頁。
 - (39) 中共中央文獻研究室編『毛澤東年譜（1949-1976）』第 2 卷、中央文獻出版社、2013 年、137 頁。
 - (40) 中共中央文獻研究室編『陳雲年譜（1905-1995）』中卷、中央文獻出版社、2009 年、170 頁。
 - (41) 薄一波『若干重大決策与事件的回顧』上卷、中共中央黨校出版社、1991 年、244 頁。
 - (42) 『落井下石：重查高崗案』125-126 頁に引く張聿温『死亡聯盟：高饒事件始末』

中国青年出版社、2007 年の記述による。資料の出所は明示されていない。『毛沢東年譜（1949-1976）』第 2 巻のこの日（1953 年 8 月 9 日）の記載も空白である。しかし薄一波は、毛沢東が高崗を叱責した事実を書き留めたうえで、「後になってこの毛主席の言葉を振り返れば、高崗・饒漱石の財經会議における演出に、主席が何か感ずるところがあったのではないかと思う」（『若干重大決策与事件的回顧』上巻、244-245 頁）と記した。

- (43) 『陳雲年譜（1905-1995）』中巻、1953 年 8 月 9 日の条に付した注(1)、173 頁。
- (44) 中共中央文献研究室編『鄧小平年譜（1904-1974）』中巻、中央文献出版社、2009 年、1955 年 3 月 13 日の条、1219 頁。
- (45) 『半截墓碑下的往事：高崗在北京』114 頁。習仲勲は、「この「聖人」が、人聖（高崗を指す。人格の高潔さを示す）を陥れた」と良く口にしたと言う。『落井下石：重查高崗案』203 頁。
- (46) 『半截墓碑下的往事：高崗在北京』114 頁。
- (47) 同上、115-116 頁。
- (48) 中共中央文献研究室編『毛沢東伝（1949-1976）』（上）中央文献出版社、2003 年、278 頁。
- (49) 『毛沢東年譜（1949-1976）』第 2 巻、209 頁。
- (50) 『半截墓碑下的往事：高崗在北京』183-185 頁。
- (51) 同上、144 頁。
- (52) 李力群「对『中国共产党歴史』2 巻中需要澄清的幾点意見」（2011 年 2 月 22 日）陳大蒙、趙世秋『高崗罪案重審』明鏡出版社、2014 年、444 頁。
- (53) 『毛沢東年譜（1949-1976）』第 2 巻、209 頁；『鄧小平年譜（1904-1974）』中巻、1150 頁；『陳雲年譜（1905-1995）』中巻、191 頁。
- (54) 『若干重大決策与事件的回顧』上巻、244-245 頁。
- (55) 『毛沢東年譜（1949-1976）』第 2 巻、210 頁。
- (56) 中共中央文献研究室編『陳雲伝』（下）中央文献出版社、2009 年、886-887 頁。
- (57) 『高崗罪案重審』40 頁。